# 婦人の手帖

H.N

## 「子供に遊び場を！」母は訴える

三月八日－横浜の中学校でプロレスごっこをして、生徒を死亡させた事件があった。この事件は横浜だけの問題ではない。つねに起り得る可能性をはらみながら、われ／＼の身辺を取りまいている。たゞそれが悲惨な深刻な事件として具体化されなかったゞけに、世人の関心が注がれなかったというだけのはなしなのである。しかし、一歩誤まれば取返しのつかない場面を招くという危機に迫られている。

◇西部劇ごっこ、チャンバラごっこ、プロレスごっこ、ギャングごっこ等、最近の子供達の遊びは一連の兇悪なごっこ遊びが流行している。小路の奥で、土手の青草の上に、"ヨラバキルゾ"と、棒キレを大上段に振りかぶっている子供を見るたびにもし誤って目でも突いたら……と、背筋に冷いものが走る。子供は無邪気だ。しかし、なんの危険も感じないで遊んでいる子供に代って子の親が考えねばならない。"明日では遅すぎる"子供達の遊びをもっと親が真剣に考えてもいい時期のようだ。

◇紙芝居、俗悪な映画等々子供達の空想は、俗悪な環境に取巻かれている。しかも、映画の入場料の大幅な値下げによって子供達の映画に接する機会は増し紙芝居も入替り立替り町角に訪れる。その中に子供たちの空想力は育てられ、伸ばされているのだ。どうしても健全な、清潔なものが影をひそめてゆく。このむしばまれた童心をなんとかして明るい、ランマンな童心に戻させたい。

◇しかし、世智辛い世相。親は忙しい。子供のことなんかにかまっていられない。きっとこんな親たちがたくさんいることだろう。仕事に追われて子供のよき遊び相手としての時間を持てない家庭もすくなくはないとおもわれる。しかし子供を守らなければならない。俗悪な空気に子供たちの童心を汚染させたくない。

◇遊ぶ適当なる場所もなく、相手もいない子供であってみればあるいはそんな遊びより――紙芝居、映画のヒエロンを真似て――ほかに思いつかぬのかもしれない。子供が健全に、ランマンに遊べる場所が欲しい。そして、むしばまれた童心を、清潔に、自由に、無垢な童心に返したい。こうねがうのは、わたしひとりだけだろうか。

# 春　花　櫻

——花見に行かれざりし人に——

### 春の頌歌

春が來た、野にも、町にも春がきた。路傍の草はやおら芽を吹き、長い冬のあいだ土中に眠っていた蛙も、小川のほとりを跳び始める。シビレをきらし待ちあぐんでいた太公望連も棚の中から愛用の釣竿を取出して、ススを払い、腕をさすり、はやくも大漁を夢みる。

春は海越え、山越え、里越えて、野にも、山にもやってくる。そよ吹く風は南かぜ、柳の枝に囁いて、春がきた。

花、花、花、……

春は花、花は桜、春たけなわの花見時。花の香りを求めて、加治へ、大河津へ、村松へバスが走る。ほこりを立てて、デコボコの道をガタゴトと走る。

「花に浮かれて人が騒ぐ、ぼくもゆきたいがなかなか暇がないし、金もない。今年もあきらめるか」と、ヤケ気味に、負け惜しみ的に花に浮かれざる仁もなくはない。こんな人はいながらにして、花見気分を満喫できる白根公園の観桜を推奨したい。

さゝやかな、静かなものではあるが、そこはあなたの花に対する愛情と、風雅なる詩心によっておぎない、金もいらない、時間もかけない花見なのだから、と思いばあきらめもつく。

東を仰げば残雪に粧れた粟岳守門の峯が聳え、西をのぞめば菜の花の霞むあなたに弥彦の霊峯を見る。この田園の谷間に春ランマンと咲き誇る桜花が川の面にかげをうつし、やわらかな春風にほろ／＼と花びらが散ってゆく。こんな風情にそゞはかとなきセンチメンタルを感じ、心の底にくすぶっているあなたの風流心を八〇％くらい満足させやしないだろうか。

### 春の悲哀と怒り

ところがオドろいた。先日、その公園を歩いた。もはや踏みにじられ、荒らされた、イナカの公園風景にしかない。芝生は踏みに踏まれてハゲだらけ、植えられてある、かえでの樹上にコモがかけられて、心なき子供の樹上家屋がつくられ、ブランコがかゝって、公園のおもかげは失われてしまっている。

このざまでは、とても花に対して詩情を捧げるなんていういとけなき感傷も、雅心もあったモンぢゃない。家を出て公園まで歩くあいだの詩情でしかなかった。瞬間の感傷は、失われた公徳心に対する憤慨にひょう変して、限りなき哀しみをさそわれ、怒りにかられた。

白根町に住む人にとって、あの公園は絶好の安息の場、憩いの場なのである。庶民に詩情と慰籍をもたらす緑地帯なのだ。そして、若い世代にとっては、なんとなくロマンチックな、甘い思い出の秘められた場所なはず。それがムザンに痛めつけられ、荒されている現状に呆然とした。すくなくとも「こゝが白根公園でございます。」と新潟から白根を訪れる友に誇らしく語れなくなったのである。

花見にゆきたくとも、ゆけぬ多くの人のためにも、整備し、ゆけざる悲哀と、ウップンを晴らさせうる場に、そしてこよなき町民のリクリエションの広場としての公園たらしめたい。（三〇、三、三）

## 白根俳壇（自由律）

○　長谷川杉郎

ねこやなぎの枝を手繰り大巾に跨いだ滯

残春ゑのぐのないかをのをんなにある魅力

○　桜沢喜作

梅活けて梅のつぼみ荒壁の床の間

通夜の冬夜しぜん政治の話にうつり

○　室崎沙起夫

山鳥とび立つ篁が早春

陽満ちて庄屋屋敷辛夷まだ咲かない

○　中村宵鈎

雪解れた事を知ってバケツの寥鮒の眼だま

家の米びつ空ッな日で春雪が降ります

○　小川光明樹

川の流れと歩み枯芝柔かく

春の吹雪する花売所ない庭の花々

○　中村乱水

話まだあどけなく帯の舞扇

年寄りに閉める障子残春の雨を感じ

## 白根俳壇（定型）

○　田中白朗

雪水漬き美しき枝尖へり

物の匂ひ雪の市場の傘ふれあふ

○　生野十平

生あるものは生きよう雪の下に芽萌

整然と寒夜の車内女の脚

○　鈴木冬雷

野犬狩二足三足雪汚す

雪の降り降く犬の眼をぬらす

○　中島素竹

宵みどろ浮べて淀み雪解水

夜業はや障子の桜の紐まれゆく

○　山崎つや鼓

桜を押す太息の地にとゞきたる

鍋の湯気どっと広がり玉霰

○　山崎しず穂

雪晴れて笹飴売りのかをりけり

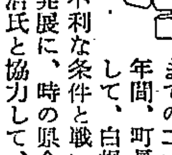
口笛で犬呼ぶ男北風に緊る

○　木村平地路

海鳴りか耳鳴りか今夜霜降るか

雪堀れば其奥背し更に堀る

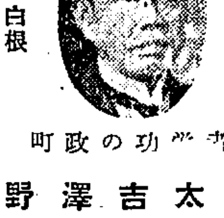
## 人



大正十三年より昭和二十年までの二十二年間、町長として、白根の地理的に不利な条件と戦いながら町の発展に、時の県会議長相沢成治氏と協力して、献身的努力をさゝげられた。昭和六年、大火後の白根町の復興のために非凡な手腕を発揮し、昭和七年、上水道の設置、同八年、役場の新築、同十年には理研電線白根工場の誘置、同十六年塵埃焼却場の新設や、小学校の新築等、白根町の発展のために産業、衛生、厚生、福利、に示された業績は驚異的である。

また、野沢氏は治水面にも尽力され、当時の高度なる技術と綿密なる計画で始められた白根郷の土地改良も氏の業績によるところが多く、須藤、相沢両氏とならび、治水に尽された氏の力量は高く評価される。

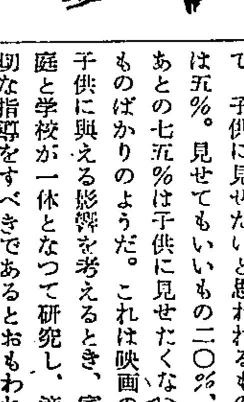
また、現在のイナカとしては立派すぎる火葬場は大正十五年氏の寄贈によるものであり昭和十八年には氏の庭園を白根公園として町民に解放する等、町と町民のために私財を惜しむことなくなげうたれた。恐らく白根町が時代に遅れることもなく発展したのは野沢氏と相沢氏の功労であると断言するも過言ではない。紺綬褒賞下賜二回、木杯下賜一回、土地改良の功により帝国耕地協会より褒賞を受け、県より産業振興の功により表彰。明治五年四月生八三才。



町政の功労者

野澤吉太郎

## 声



### 二つの映画館

白根の町に映画館が二つできた。映画ファンには同慶のいたりである。二つの映画館ができたので、わたしたちは多くの映画を安く、早く、しかもサービスのゆきとどいた映画館で観ることができるようになった。

しかし、この現象は子供をして映画マニヤ化した。これは決して小さな問題ではない。親たちは子供にせがまれゝば、つい子供に負けてしまう。映画の質を考えないで映画の観覧回数によって映画観覧の可否を定める。こんな傾向が親たちになくはないだろうか。

すくなくとも上映される映画で、子供に見せたいと思われるものは五%。見せてもいいもの二〇%、あとの七五%は子供に見せたくないものばかりのようだ。これは映画の子供に与える影響を考えるとき、家庭と学校が一体となつて研究し、適切な指導をすべきであるとおもわれる。

さらに最近における映画宣伝や、客よせは常軌を脱してはいないか、レコードの噪音で、きけばその近辺は会話やラジオが聞けぬことがしばしばあるという。あんなにはげしくガナり立てなければ、客は寄らないのだろうか。ナイト・ショウと称する夜なぞ、夜の十時過ぎでもあの調子だという。国政、県政、町政にたづさわる人を選ぶ選挙さえ、連呼は禁止された筈なのに、あの騒音は許されるのだろうか。識者の判断をまつ。

（横町　英夫）

## 編集後記

◇合併の直前直後で公民館はゴッタ返し、加えて新町建設計画書の入手がおくれて、発行が一ケ月もおくれてしまった◇毎度のことながら諸兄姉に申しわけない。深く陳謝する◇いよ／＼館報も最終号長らく御愛読下さった諸兄姉ともお別れである。つねに叱咤と激励と指導を与えて下さった諸兄姉に感謝する◇編集陣も一生懸命やったのだけれども、満足すべき館報を作り得なかったことを残念におもう◇しかし、取材から整理までマルッキリ素人ばかりの集りで不手際の連続、許していたゞきたい◇長く御愛讀下さった諸兄姉よ、ありがとうございました。しかしお別れの言葉を諸兄姉にさよならをさゝげねばならない。新しく生れるであろう館報の前途を祈りながら、"さよなら！"と再びさゝやく。

（和　郎）

## 暗

### 火魔

「いとけなき学童たち、"火の用心――"」と、カヂカム手で拍子木を打ちながら、毎宵町を歩いてくれる。吹雪の荒れ狂う夜も、風がひゅうひゅうと吠えていた夜もたゆまず、休まず、可愛い声をはりあげる。ご苦労さん。ありがとう。ホントにこの可愛いねがいをあざけるように、このところ火魔しきり。

昨年十月の桜町の火災以来、白根町は火魔にみせられたごとく十一月－神屋、一月－一ノ丁、さらに二月は桜町に未然出火、一、二ノ丁裏のオート三輪火事、三月、スワノ木。

神経質の人間は、火災の恐怖におびえ、いまにもあの不気味な消防車のサイレンがうなり出しゃしないだろうかと、セン／＼キョウ／＼。風の強い晩なぞ、不安で枕を高うして眠りつかれぬ日もいくたび。火災の恐しさは、いまさら書くには及ぶまい。生活の基本要素、衣、食、住がマルッキリ灰になってしまうのだ。と書けばカンタンなハナシ。しかし、一着の背広さえやせるおもいで月賦でつくり、家一戸建てるにナマヤオロカの金では建てられぬ御時世、それが一刻にして灰になってしまうのだから、げに恐ろしきこと。

おもえば、昭和六年の大火より三十余年、白根には火事らしい火事が発生しなかった。この四半世紀にわたる平穏が町民の防火精神を弛緩せしめたのだろうか。家を出るとき、火から離れるとき夜寝るまえにもう一度火の用心はよいか、おたがいにたしかめよう。"災害は忘れた頃に音もなく前ぶれもなくやってくる"

## 明

### 花見

この花が古来より我が国にいかに愛賞されたかは、なにもいまさら書きたてることはあるまい。

この花の本邦最初の記録は、「日本書紀」万葉の時代にはさかんに謳歌されたもの、"去年（こぞ）の春、逢へりし君に恋にてし、桜の花は迎へ来らしも"これは万葉時代の青年が、桜の花に寄せて、メン／＼たる恋心をうたったロマンチックなセレナーデ。平安朝時代になると"もゝしきの大宮人はいとまあれや桜かざしてきょうも暮しつ"（赤人）と、みやびやかな、のどけき春の風景がほうふつ。

さらに江戸時代は"山里の春の夕ぐれ來てみれば入相の鐘に花ぞ散りける"（能因）"桜花とく散りぬともおもほえむ人の心を風吹きあらぬ"（貫之）と、一流歌人に賞され、花に寄せる情も主観的となり、もののあわれを感じさせる詩情の名歌が多くうたわれた。

春の花見の起源は嵯峨天皇の弘仁三年（西紀八十二年）春、桜花ランマンの神泉苑に幸したもうたときに起りそれより恒例の儀式となった。しかし封建世相にふさわしく花見は貴族階級の特権で、平民には御法度。紅白のとばりの中でさんざめく貴族連中の詩歌三絃の音と、芳香を放つ桜花をはるかに眺め、かすかに耳をそば立てるのみ。

花見の大衆化は江戸時代、世は太平猫はネズミを取ることを忘れ、人間は借金をとることを忘れる時季、花に浮かれて、腰のみさごにアルコールをつめて大ッピラで花の下で呑み歌い、かつ踊れるようになった。

原産は支那、本科はイバラ科、世界に二五〇種、本邦は白生三〇種他多数変種あり。